

地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会

第26回海域活断層評価手法等検討分科会 議事概要

1. 日 時 令和6年3月4日（月）13時30分 ～16時55分

2. 場 所 文部科学省18階研究開発局会議室1
 東京都千代田区霞が関3-2-2（中央合同庁舎第7号館）

3. 議 題 (1) 日本海南東部（仮称）の海域活断層の長期評価について
 (2) その他

4. 配付資料
 (本資料)
 海活 26-(1) 第25回海域活断層評価手法等検討分科会議事要旨（案）

 (参考資料)
 海活26参考資料1 メーリングリスト[umikatsu]における議論
 海活26参考資料2 日本海南東部（仮称）の海域活断層の長期評価に関する資料
 海活26参考資料3 日本海南東部（仮称）における地震活動の特徴と断層面の下端の深さについて

 海活26参考資料4 日本海南東部（仮称）における断層トレース案および断層命名案
 海活26参考資料5 日本海南東部（仮称）の海域活断層の特性表案
 海活26参考資料6-1 近畿ー北陸沖海域活断層案及び反射断面（隠岐トラフ南縁）（岡村主査資料）
 海活26参考資料6-2 近畿ー北陸沖海域活断層案及び反射断面（隠岐海嶺）（岡村主査資料）
 海活26参考資料6-3 近畿ー北陸沖海域活断層案及び反射断面（富山湾）（岡村主査資料）
 海活26参考資料7 これまでに審議した評価対象断層の反射断面
 海活26参考資料8-1 日本海南東部（仮称）の海域活断層の評価・公表方針
 海活26参考資料8-2 日本海南東部（仮称）の海域活断層の当初公表時の評価文イメージ
 海活26参考資料9 能登半島北方沖海底地形図（海上保安庁資料）
 海活26参考資料10 日本海南東部（仮称）の海底地形図
 海活26参考資料11 日本海南東部（仮称）の海底地質図
 海活26参考資料12 日本海南東部（仮称）のブーゲー異常
 海活26参考資料13 気象庁一元化震源による震央分布
 海活26参考資料14 気象庁一元化震源による発震機構解分布

- 海活26参考資料15 F-netによるメカニズム解の分布
 海活26参考資料16 日本海南東部（仮称）における日本海地震・津波調査PJによる断層モデル

5. 出席者

- 主査 岡村 行信 国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
活断層・火山研究部門名誉リサーチャー
- 委員 芦 寿一郎 国立大学法人東京大学新領域創成科学研究科准教授
 石山 達也 国立大学法人東京大学東京大学地震研究所所准教授
 伊藤 弘志 海上保安庁海洋情報部技術・国際課海洋研究室上席研究官
 高橋 成実 国立研究開発法人防災科学技術研究所地震津波火山ネットワーク
センター上席研究員／国立研究開発法人海洋研究開発機構
海域地震火山部門地震津波予測研究開発センター上席技術研究員
- 仲西 理子 国立研究開発法人海洋研究開発機構海域地震火山部門
地震発生帯研究センター主任研究員
- 森川 信之 国立研究開発法人防災科学技術研究所
マルチハザードリスク評価研究部門主任研究員
- 山下 幹也 国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター
地質情報研究部門資源テクトニクス研究グループ主任研究員
- 事務局 郷家 康徳 文部科学省 研究開発局地震・防災研究課長
 重野 伸昭 文部科学省 研究開発局地震・防災研究課地震調査管理官
 佐藤 壮紀 文部科学省 研究開発局地震・防災研究課地震調査研究企画官
 細川 周一* 気象庁地震火山部管理課地震調査連絡係長
 松尾 健一* 国土地理院測地観測センター火山情報活用推進官
 熊谷（文部科学省 研究開発局地震・防災研究課）

※*はオンライン参加

■（地震予知総合研究振興会※）

※委託事業「地震調査研究推進本部の評価等支援事業」の受託者
 海域断層データベース操作者

6. 議 事

岡村主査：（開会）

事務局（重野）：〔出席者確認〕委員全員が出席。今回は独立行政法人エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の資料を使用するため、原則対面での開催としている。

事務局（熊谷）：〔配付資料の確認〕

事務局（重野）：〔第25回議事要旨（案）の確認〕会議終了後までに修正がなければ承認していただきたい。

※事務局注：本会議終了までに修正の意見はなく、案のとおり承認された。

議題1 日本海南東部（仮称）の海域活断層の長期評価について

—本日の分科会の進め方について—

岡村主査：本日の分科会の進め方について、事務局より説明する。

事務局（熊谷）：（海活26参考資料2 p.2に基づき説明）

岡村主査：ただいまの説明について、ご意見・ご質問等あるか。

（意見なし）

—断層の名称について—

岡村主査：断層の名称について、事務局より説明する。

事務局（熊谷）：（海活26参考資料2 p.3～6に基づき説明）

岡村主査：活動区間に基づいて「断層帯」と「断層」の名称を使い分けるという提案である。この件について、ご意見・ご質問等あるか。

（意見なし）

岡村主査：日本海南西部の海域活断層の長期評価（第一版）においても、この原則に従って「断層帯」と「断層」の名称を使い分けていたため、この海域において変える理由はないと思う。トレースとして複数あるように見えたとしても、活動区間として1つであれば、1つの断層となる。

—日本海南東部（仮称）における地震活動と断層面の下端の深さについて—

岡村主査：日本海南東部（仮称）における地震活動と断層面の下端の深さについて、事務局より説明する。

事務局（熊谷）：（海活26参考資料3に基づき説明）

岡村主査：断層面の下端の深さについて、事務局から提案があった。ただいまの説明について、ご意見・ご質問等あるか。

石山委員：結局は、日本海地震・津波調査プロジェクトの区分に基づく方針ということか。

事務局（熊谷）：そうである。もちろん、地震活動の様子も確認するが、気象庁一元化震源のデータから見ると、比較的整合が取れているように思える。

石山委員：15～20km程度と幅を持たせているところがあるが、随分と変わってきてしまう。また、海活26参考資料3 p.27に平成25年度日本海地震・津波調査プロジェクト成果報告書の図面が引用されているが、これは途中の図で、この後にMCSのショットデータを使って更新しているのはいいか。今回の対象海域の沿岸域も解けていることになっているため、松原氏に作ってもらっても良いのではないか。今、陸域の活断層における評価では■を採用していたか。

事務局（佐藤）：陸域では■

石山委員：陸域に近いので、陸域と大きく異なることはしない方がよい。松原氏は既に作成しているのではないか。日本海地震・津波調査プロジェクトは、基本的にそういったデータがないものとし

てやられているため、比べた上でより尤もらしいものを採用する方針が、沿岸域については望ましいのではないかと。隠岐トラフ周辺では、データがないため難しいかもしれない。決定精度が良くないため、地震活動分布の下端を見るというよりは、その方が良いのではないかと。たとえば、2007年能登半島地震の下端深さについて、Sakai et al. (2008)と気象庁震源では深さ3~4 km程度の違いがある。

岡村主査：石山委員からの提案の、松原氏の最近の解析結果は使えそうか。

石山委員：今回の能登半島地震の余震活動で大分、決まる気はする。

岡村主査：今回の活動における震源は割と浅い。

石山委員：OBSを入れて再解析をしたものが一番良いデータになるのではないかと。

事務局（佐藤）：（資料を画面に表示しながら）これは近畿地域の活断層評価のために、松原氏に作成していただいた図である。そのため能登半島は含まれていない。

石山委員：一応、大体は解けている領域に入っている。

事務局（佐藤）：この図では、青色が下端の深さが15kmよりも少し深いくらいで、紫色が20kmである。これがD90で、次がD95である。D100になると良く分からない図になってしまうため、D95くらいで見ると良いのではないかと。

石山委員：この図面は陸域の活断層を対象として作られたものであるため、日本海（海域）についても使うことが出来るのか、確認した方が良い。

岡村主査：能登の西側辺りで急に深くなっている。

石山委員：多分、富山湾は挟まれているので決定精度はそれ程悪くないと思うが、若狭湾の辺りは観測点的に難しいかもしれない。もし信頼性が低いと松原氏が言うのであれば、それは仕方ない。もう一点、富山トラフの付近では深さ15~20km程度となっているが、これは富山舟状海盆西縁断層のことか。

事務局（熊谷）：そうである。

石山委員：これは背弧リフトと大陸地殻の境界にあたると思うが、日本海地震・津波調査プロジェクトでは厚い脆性領域と薄い脆性領域の境界に分布する断層は、薄い脆性領域の深さに合わせて考えることになっていた筈である。それよりも深い部分は、パワーロークリープになってしまう。海活26参考資料3 p. 29、右上の図のような考え方で、日本海東縁部でも同様である。

事務局（熊谷）：背弧リフト縁の方に該当するという事か。

石山委員：背弧リフト縁で良いと考える。地図の色付けも、このように塗っているだけで、基本的にはピンクと白の境界に断層があるということだと思う。海活26参考資料3 p. 29の右下、オレンジ枠内のような扱いで良いのではないかと。

事務局（佐藤）：ただし、今回の能登半島地震では東側で震源が若干深くなっており、深さ15kmを超えている。そのような理由もあり、（事務局案では）15~20km程度とした。

石山委員：その辺りに関して、これから出てくるデータをどのように考えるか。

岡村主査：一番東に分布する断層モデルは、佐藤・他(2014)のモデルでも深くなっていなかったか。

事務局（熊谷）：（海活26参考資料16 p. 11を画面に表示しながら）これである。

岡村主査：15km になっている。

石山委員：実際に地震が起きてしまっている。

事務局（佐藤）：今回の地震活動を見ると、この海域ではもう少し深いように見える。

石山委員：今、OBS を置いているところである。

岡村主査：OBS の結果はいつ頃に出るのか。

石山委員：そんなに早くはない。

高橋委員：（結果が出るのは）回収してから一ヶ月程度ではないか。

岡村主査：回収はいつになるのか。そんなにすぐには出てこないだろう。それでは 15km として、隠岐トラフも同じ考え方でいくと 15km になる。大陸地殻と厚い海洋地殻の境界だ。

石山委員：海活 26 参考資料 3 p. 30 では、18km (25 km) となっている。この海域には日本海地震・津波調査プロジェクトでも確か断層モデルを置いていなかったか。

事務局（佐藤）：（海活 26 参考資料 16 p. 7 を見ながら）（日本海地震・調査プロジェクトにおける断層モデルでは）15～17km となっている。

石山委員：17km というのはどこから来たのか。

事務局（佐藤）：事務局案で 15～20 km 程度としたのは、5km 単位の区分であるため、15km と 20 km の間くらいという意味である。

石山委員：ここはそれで良いのではないか。今後とも変わり得るところは仮の値を入れておいて、後で変えるのはどうか。

事務局（佐藤）：今回は速報として出すため、今後の観測結果によって変わる可能性があるという注釈付きで出すことも出来る。

石山委員：その方が良い気がする。

岡村主査：深さが変わるとマグニチュードが変わるのか。

事務局（佐藤）：マグニチュードは変わらないが断層モデルは変わるため、シミュレーションの結果は変わる。

高橋委員：佐渡ヶ島に F-net 観測点は一点しかないため、北東側はあまり震源の決まりが良くないのではないか。

事務局（佐藤）：それでは、海活 26 参考資料 3 p. 30 の C を 15km 程度とし、隠岐海嶺はそのままとすることでどうか。とりあえず仮の値として、今後にも変わる可能性があるという注釈をつける。

岡村主査：それで宜しいか。森川委員から何かご意見あるか。

森川委員：今回の能登半島地震で震源インバージョンをした際に、深い方のすべりの有無については確認しているのか。

事務局（ ）：強震動データに基づく断層モデルにおいて、北西傾斜の断層を設定しているものはなかったと思う。

事務局（佐藤）：確かに、北西傾斜は置いていない。

事務局（重野）：津波データを用いたインバージョンでも北東側には特に断層を置かなくても説明でき、北東側の断層が活動したとする積極的な証拠は地震調査委員会では報告されていない。

岡村主査：それでは地震発生層の下端深さは、隠岐トラフでは15～20km程度、その他は15km程度ということで、とりあえず準備を進めたい。

伊藤委員：海活26参考資料3 p.30、それ以外の領域の「15km程度」というのは、15kmプラスマイナス幾らという曖昧さを示していると思うが、その上の「15～20km程度」というのは、15～20kmで既に曖昧さを示しているため、「程度」という言葉は不要ではないか。言葉の使い方に決まりがあるのであれば構わない。

事務局（佐藤）：陸域の活断層でも、同じように15～20km程度と書かれている。

伊藤委員：「約」と「程度」は、曖昧さの違いで決まっているのか。

事務局（佐藤）：そうである。「約」と「程度」については決まりがある。

事務局（ ）：プラクティカルに断層を置くときには、15kmや18kmにしてしまう。

事務局（佐藤）：計算上は17.5kmになるのか。

事務局（ ）：18kmだと思う。

岡村主査：これは多少、この幅から外れることもあるという意味か。15kmより多少浅いかもしいないし、20kmより多少深いかもしいない可能性もあるということか。

事務局（佐藤）：そうである。

岡村主査：もし余裕があれば、表現の使い方について整理しておいてもらいたい。

—海城断層データベースを用いた議論—

事務局（熊谷）：（海活26参考資料4、海活26参考資料5に基づき説明）

事務局（熊谷）：（海城断層データベースの画面を見ながら）能登半島の北西沖の方から審議を始める。

岡村主査：一番西側の、前ノ瀬南方断層や内灘沖断層を表示してもらいたい。⑳の断層である。

事務局（ ）：今表示している測線では多分、端をかすっていたと思う。端を通るか、通らないかくらいの所である。

岡村主査：断面で言うと、一番端になる。黄色であるため、線が入っていないところなのか。

事務局（ ）：そうである。今示している測線でしか前ノ瀬断層を横切っていなかった気がする。

岡村主査：どこを見ているのか、位置図と断面の関係が良く分からない。

事務局（佐藤）：カーソルが十字になると出る。これが羽咋沖東断層である。

岡村主査：この2つの断層（羽咋沖東断層ならびに羽咋沖西断層）については、西傾斜の逆断層で良い。さらにその西側には、前ノ瀬南方断層が見えているかどうか。沖ノ瀬断層と、前ノ瀬南方断層との境界になっている。これが沖ノ瀬で、こちらが前ノ瀬南方である。切れていることは間違いのない。もう一つ南側の測線で良いものがあれば、この2つの断層が見えており、この断面図においても切れている。これ（前ノ瀬南方断層）は西側が隆起しているため、西傾斜の逆断層であると考えられる。

事務局（ ）：2本並行に走っている断層のうち陸側、東側である。その沖合に内灘沖断層がある。

石山委員：2本の断層トレース（前ノ瀬南方断層ならびに内灘沖断層北部）は、（反射断面図におけ

る) これらを見ているということか。

岡村主査：そうである。背斜構造が認められるものを両方とも断層としてトレースを引いたが、この断面図を見ると東側の前ノ瀬南方断層だけで良いかもしれない。

事務局 ()：東側の方が立派である。

石山委員：この断層の傾斜方向についてはどうか。

岡村主査：内灘沖断層北部、現在表示されている断面で見えているものは西傾斜であるが、南側では東傾斜になる。

石山委員：これが東傾斜か。

岡村主査：その下までは行かないが、そこで切れる。

石山委員：この場所では東傾斜なのか。

岡村主査：この場所における傾斜方向については良く分からないが、それより南に行くと東傾斜になる。

石山委員：どこを見ているのか。今表示されている断面では東傾斜である。ここは不整合で切っているのではないか。

岡村主査：ここは不整合である。(断層を) 引かなくても良いかもしれない。

事務局 ()：20b の北か。

石山委員：これは切っている。

岡村主査：これは不整合で、もうほぼ中新世の不整合である。

事務局 ()：それでは、内灘沖断層の北部は断層トレースから削除するのか。

岡村主査：取ってしまったても良い。すぐ南側にある青線のデータはあるのか。この測線の断面図が断層まで届いているかどうか。

DB 操作者：記録はここまでである。

岡村主査：南側では明瞭に東側が隆起しているが、その下がり始めくらいが見えているのかもしい。

事務局 (佐藤)：内灘沖断層では北部を削除するのか、その場合には短い断層になるのか。

事務局 ()：南側に位置する断層は短くはないため、短い断層にはならないかもしれない。

事務局 (佐藤)：現在の評価における内灘沖は 29 km である。

岡村主査：もう少し右側に行って欲しい。

事務局 (佐藤)：別物だ。これは今、一緒になっているのか。

事務局 ()：そうではない。

事務局 (佐藤)：別のまま、短いものが 2 本になるのか。西側のものは。

事務局 ()：内灘沖断層は、今は繋いではいない。

事務局 (佐藤)：29 km はより南の断層から算出されたものであり、トレースを取るだけということか。

事務局 ()：短くはなる。分けを私が間違えているかもしれない。これよりもこちらの方が立派なので、ここの分はこちらだと思って、内灘沖断層はここまでにして。これが②⑥であるから、北部は消えても良い。

事務局（佐藤）：要するに、ここを切るということか。

事務局（ ）：そうである。

事務局（佐藤）：それでは、北部についてはトレースから削除する。

岡村主査：これは西傾斜の逆断層で、これがこちら側に上がってくる。

岡村主査：この辺はマイグレーションしてあるのか。ノイズがある。

石山委員：マイグレーションしているが、残ってしまっているというか。

岡村主査：これは多分、古い構造だと思う。ここに不整合がある。

石山委員：この少し曲がっているところはどうか。

岡村主査：前ノ瀬南方断層の最南端に相当する。

石山委員：ヒンジの位置が合わないというか、少し下と合わないような気がする。

岡村主査：処理が上手くいっていないように見える。これはどこのデータなのか。

DB 操作者：JAMSTEC のデータである。SG140 とあるが、何のプロジェクトなのかは分からない。

石山委員：SG140 であれば、日本海地震・津波調査プロジェクトによるデータである。（断層について）あまり良く分からない。不整合面が少しあるが、これは端なのか。

岡村主査：断層の端である。

事務局（ ）：前ノ瀬南方断層は短い断層であるため、場所だけである。

岡村主査：この南側に位置する加佐ノ岬沖断層等に関する深部断面はもう見たのか。

事務局（熊谷）：それらの断層に関する深部断面は既に確認している。

岡村主査：見たのであれば良い。北に上がることにしたい。

事務局（ ）：門前沖断層は 2007 年能登半島地震時に活動したところである。門前沖断層と海士岬沖西断層が一繋がりようになっていたが、門前沖断層は動いているが、海士岬沖西断層は 2007 年能登半島地震時に活動した感じがしないため、一応分けている。文字が書けないため消えてしまっているが、海士岬沖西断層というところで、ここだけ少し残している。辛うじて 20km を超えている。

石山委員：これは丁度、2007 年能登半島地震時に動いたところか。

事務局（ ）：屈曲した先（南西側）は動いていないと思う。余震活動が殆ど見られなかった。

岡村主査：その北側、この断層はどこに行くのか。

事務局（ ）：沖ノ瀬東方断層は 3 本ほどあるが、曲がってくっついているものだ。

石山委員：ここも佐藤氏が地震発生後に調査している。

岡村主査：ここもか。何本かはとっていた。3 本くらいだったか。

石山委員：赤線は日本海地震・津波調査プロジェクトにおける東京大学地震研究所による測線である。（それとは別に）2007 年能登半島地震の後に調査した測線がある筈である。地震研究所集報に出版されているが、二船式でとっている。これ（海域断層 DB）には出していない。

事務局（ ）：岡村主査のトレースは、赤紫色か。南東傾斜で良いか。

岡村主査：そうである。

DB 操作者：少し修正されている。昔のものが黒い方で、新しい方がこれだ。この辺りで少し変わって

いる。

岡村主査：その辺りは少し変わっている。データを今、再処理している。見直すと良く分かるようになったので（トレースを）変えている。もう一つ北の測線に行くかどうか。そちらはもう断層トレースにかかっていないのか。

DB 操作者：引っかかっている測線が1本あるが、これではないかもしれない。断層走向が近いものしかない。しかも曲がっている。

岡村主査：それを見せてもらいたい。

岡村主査：（表示されている断面図において）左側が南西になるのか。こちらが上がって、こちらが下がっている。

DB 操作者：そうである。北側が落ちている。

岡村主査：この北の測線ではどうか。この端は来ていない。ここは相当近いので、多分マルチは無理だ。

岡村主査：この辺りは凸凹しているが、どれも古いと考えられる。これが中新世で、この辺りは全て中新統の地層であると考えられる。

事務局（熊谷）：②④と②⑤の括り方について、門前沖断層と海士岬沖東断層と西断層を一括りにするかどうか。

岡村主査：断層の括りに関してはまた後で議論することにし、深部断面を先に確認したい。

DB 操作者：一つずつ北側に行く。再処理したのものがあるが、あまり変わらない。

岡村主査：あまり綺麗ではない。この辺りが北側の断層になるのか。

DB 操作者：そうである。

事務局（ ）：輪島はるか沖断層は南東傾斜で良いか。

岡村主査：南東傾斜である。

石山委員：主はこちらかもしれないが、ここにもある。

岡村主査：こちらは浅いところでは殆ど平らで、ここから急に上がる。

事務局（ ）：輪島はるか沖断層と能登半島北岸断層帯猿山沖区間は南東傾斜として、特性表に反映する。

石山委員：これがその海底地形か。

岡村主査：そうである。

事務局（ ）：これはタイムか。

DB 操作者：今、タイムにしている。この辺はマルチだと思う。深さ断面だとマルチが良く分からなくなってしまう。

岡村主査：ここ（輪島はるか沖断層と能登半島北岸断層帯猿山沖区間周辺）についてはこれで良いか。

石山委員：良いと思う。多分他のところもそうだが、こういったハーフグラバーベンでこちらが動いている。

岡村主査：そういったところもあるのか。

石山委員：結構、そういった所がある。2007年能登半島地震もそうである。

岡村主査：ここは火山岩が出ているところである。火山活動がある。その北東側についてはどうか。
DB 操作者：これは東京大学地震研究所による記録である。マイグレーションの影響で明瞭には見えな
い。

事務局 ()：微妙に位置は異なるが、日本海地震・津波調査プロジェクトでも断層がある。
石山委員：(断層の) 端のようである。

岡村主査：この辺に分布する断層は、基本的にどれも南東傾斜だと思うが、宜しいか。それでは次に
進む。南はここまでは行っていないのか。

DB 操作者：記録の端がここである。

岡村主査：これも南東傾斜である。

事務局 ()：今、少し短くなっている。輪島はるか沖はその辺りは少し微妙になっている。

石山委員：(表示されている反射断面を見ながら) これが断層の端を見ているという感じか。

岡村主査：そうである。

事務局 ()：岸に近い方はあるのではないか。

岡村主査：これほど離れていたか。まあ良い。それでは次の測線に移りたい。

DB 操作者：これも東京大学地震研究所によるものである。能登半島北岸断層帯に相当するものか。

岡村主査：そうである。これも南東傾斜であるが、区間分けはどうするか。上盤の変形で少し歪んで
いる。それでは次の測線に移る。北東側である。この辺りになると不明瞭ではあるが、多分、こ
を断層としてとっている。富山舟状海盆西縁断層は逆傾斜(北西傾斜)の断層と考えられる。

DB 操作者：富山舟状海盆西縁断層周辺は、3D探査がある範囲である。

岡村主査：3Dはどのように見えるのか。自由にどこでも切れるのか。

DB 操作者：そうである。クロスラインが大体この断層と直交すると思う。

岡村主査：富山舟状海盆西縁断層がどこまであるのか、今までのデータでは決められなかった。断層
端の位置を確認したい。この辺りには立派な断層がある。

岡村主査：どこまでを断層として見るか。海底谷の東側にも何か背斜状の構造があることから、この
前はこういったものも(断層として)読んだ。しかしながら、背斜ではなさそうである。ここを撓
曲帯と見ればここに断層を読むことになるが、下はあまり背斜らしくはない。少し盛り上がって
いるか。

石山委員：何か盛り上がっているように見える。

DB 操作者：この辺りがもうデータのある北側の限界である。

岡村主査：もうデータがないのか。

DB 操作者：こちら側はなかった筈である。

岡村主査：全体がある一番北の端はどこになるのか。

DB 操作者：この辺りである。交互に走っているため、端点がどちらにかかっているか。

岡村主査：背斜構造が大分小さくなってきたが、まだある。

DB 操作者：フルスタックであるのは、この辺りくらいまでである。

石山委員：今表示している断面の縦横比は幾つか。

DB 操作者：今は1対5くらいにしている。もう少し小さくした方が良いか。1対1だと大分のっぺりとしてしまうので、とりあえず1対3くらいでどうか。

事務局 ()：佐渡のところより北に行っている。

石山委員：翼部が大きくなっている。

岡村主査：これもまだ(断層がある)。

石山委員：結構ある。

石山委員：ここは変形していないように見える。

岡村主査：ここはそうだ。こちら側で断層はこうなので。

石山委員：今はこちらか。

岡村主査：もう一度、北に。こう来て、こう来て、少しこちらに行ってしまう。(断層として認められるのは)この辺りまでか。

石山委員：これは若過ぎるので見えない。

岡村主査：その可能性はある。この辺はまだ断層がある。一番北まで、データのある範囲は(断層がある)。

石山委員：これは佐渡か。

岡村主査：佐渡である。富山トラフの東縁である。

事務局 ()：岡村主査のトレースは、その佐渡のところを掠めてから西向きに曲がっているが、むしろ東の方に向かうのか。

岡村主査：もう少し下げて、この辺のここだとして、上の測線図を拡大して、今、引いている線がどこか。(断層トレースの位置と)大体合っているが、この北は産業技術総合研究所の測線間隔が大きく間を空けてしまう。ないところと結構な距離がある。

石山委員：反射断面図において変な地形の高まりがある。

岡村主査：その高まりについても気にはなっていた。ここは他に測線はあるのか。

石山委員：場所的にも合っている。

事務局 ()：日本海地震・津波調査プロジェクトの測線はないのか。

石山委員：多分、JAMSTECによる測線がもう少し北を通っている。

山下委員：佐渡を跨いで通っている。

仲西委員：いつの調査時の記録か、データベースに全部は登録できていない。

高橋委員：2007年新潟県中越沖地震の時ではないか。

山下委員：おそらく、そうである。

石山委員：この辺りは同じような構造である。

岡村主査：この緑色の測線に対応する反射断面図は確認できるか。

岡村主査：(断層が)来るとしたらこの辺りであるが、(断層が)あるともないとも言い難い。

石山委員：(不明瞭であるため、断層が)あるとしても、かなり端の方だ。

岡村主査：どこかで止めたい。

石山委員：確かなデータがなければ、止めざるを得ない。今表示されている断面だけを見てここに(断

層を) 引くことは難しい。

岡村主査：今のラインの北端くらいになる。表示されている断面図には(断層が) あるが、北の緑線には断層は認められない。ここで止める形で宜しいか。両測線間の大凡の位置を(断層端として) 読む。今までよりも長い。

石山委員：これは結構長い。60km くらいか。

事務局 ()：60km を超えている。

岡村主査：この部分が、日本海における大規模地震の調査検討会のモデルよりも北に延びている。

事務局 ()：日本海における大規模地震の調査検討会のモデルでは佐渡を越えていない。

石山委員：小木よりも南くらいか。

事務局 ()：その通りである。

石山委員：これが今(令和6年能登半島地震時には) 活動していないという断層であり、長くなるということか。

岡村主査：そうである。北に延びる。南は重複している感じである。

事務局 ()：ここより北に行けば、もっとあるのではないか。日本海地震・津波調査プロジェクトでは中角(に相当する角度) にしているが、傾斜は高角度で良いか。

岡村主査：傾斜角を審議できる断面図はあるか。南の方が良いか。3Dの方が良いのか。あるいは東京大学地震研究所による測線は通っているか。

DB 操作者：3Dは深さ断面がない。また、東京大学地震研究所による測線はこの断層を横切っていない。これが参照できる深さ断面になる。

岡村主査：高角としているのか。

事務局 ()：日本海地震・津波調査プロジェクトでは、中角(に相当する角度) としている。

石山委員：多分、インバージョンではないか。

岡村主査：インバージョンなのか。リフトだったのか。

石山委員：そう考えたのではないか。下のリフトはあまり、それっぽくはなかった。

岡村主査：下の構造は良く見ておらず、上ばかりを見ていた。(富山舟状海盆西縁断層の傾斜角について) 高角で良いか。結構、傾いているようにも見えるが、本物かどうか良く分からない。

石山委員：高角の逆断層ではないか。高角は具体的にどの程度の角度になるのか。

岡村主査：高角は60度程度である。中角くらいの方が無難か。

石山委員：中角の方が無難かもしれない。

岡村主査：それでは(富山舟状海盆西縁断層の傾斜角については)、中角とする。

事務局 ()：能登半島沿岸域に分布する断層の傾斜は高角で良いか。

岡村主査：令和6年能登半島地震は、中角であった。2007年能登半島地震時は高角であった。(傾斜が) 同じくらいであると思っていたが、そうではなかった。

石山委員：やや中角に近い。

事務局 ()：輪島はるか沖ならびに能登半島北方沖断層の傾斜も中角で良いか。

岡村主査：それらも一緒であろう。

事務局 () : それでは中角とする。後は、北側の舳倉島近海断層であるが、日本海地震・津波調査プロジェクトでは中角 (に相当する傾斜角) としている。

石山委員 : 多分、これを見て言っている訳ではないと思う。

石山委員 : これは東京大学地震研究所のもので、これらは全部マルチである。その辺りに少しあるような感じだが、断層かどうか良く分からない。

岡村主査 : 舳倉島近海断層は北西傾斜の中角としておくが宜しいか。

(異論なし)

岡村主査 : 続けて、若狭海丘の方も確認する。

事務局 () : 海丘の北縁で断層が2本ある。

岡村主査 : 2本というか、ベーズンフロアの方の立ち上がりと、一番急な斜面の元だ。こちらも少し微妙ではある。この断面図はマイグレーションしてあるのか。

DB 操作者 : 多分しているが、海底を上手くとれていないのではないか。

岡村主査 : 若狭海丘列に分布する断層を活断層にするかどうか。基盤があまり綺麗に落ちている感じはしない。ここも下は曲がっているが、上の方は滑らかというか、水平に近い地層が覆っている。新しい変形はあまりはっきりとしない。

石山委員 : 中々、難しい。こうはなっているが、ここを埋めているようにも見える。

岡村主査 : その上は曲がっているが、ここでは曲がっていない。大体、このような感じになっている。

石山委員 : この地層の年代はどれくらいなのか。

岡村主査 : 年代は分からない。本日の資料に含めたが、Q1 層基底は、多分一番上の黒い反射面になると思う。遠いところから引いて延ばしているため、精度は悪いかもしれない。

石山委員 : これが70 万年前くらいか。推定活断層か。

岡村主査 : 活断層の可能性のある構造など、(活断層の確からしさに関する) ランクはあるのか。

事務局 () : 海域活断層では、そのようなランクは設けていない。

事務局 (熊谷) : これまで該当する構造がなかったということではないか。

石山委員 : 入れてはいけない、ということもない。

事務局 (佐藤) : 陸域の活断層の地域評価と同様であり、あってもおかしくはない。

岡村主査 : 可能性のある構造については、活断層とは評価しないのか。

事務局 () : その通りである。評価はしない。

事務局 (熊谷) : 陸域の活断層と同様で、表に整理して地図に載せる。

石山委員 : 新しい層準にあまり明瞭な変位が見えない。

岡村主査 : どちらかと言うと、西側の方が断層らしく見える。活断層の可能性を完全には否定できないため、これくらいなら断層だろうと考えて断層線を引いた。これは縦横比を小さくしているが、縦横比を大きくすると断層らしく見えてくる。

石山委員 : 似たような状況である。消してしまうのもどうかと思うので、可能性のある構造で良いのではないか。

事務局 (佐藤) : ⑦の一番長いものを可能性のある構造とするのか。

事務局 () : 西の端のものは残るのではないか。

岡村主査：これは少し尤もらしい。基盤に落差がある。

石山委員：これは正断層ではないか。(現在は)動いていない。

岡村主査：活断層かどうか。際どいと言えば際どい。縦横比を小さくすれば。

石山委員：縦横比を小さくして見ると正断層のドレープでも良いのではないか。逆断層ならこのようにはならない。正断層で良いのではないか。

岡村主査：この辺まで曲がっていると思えば、(活断層で)あり得なくはない。

石山委員：また、少し気になるのは、この辺を切っているようにも見える。

DB 操作者：正断層だと非常に低角になる。これが1対1であるため、これくらいの傾斜だと30度くらいになる。

石山委員：これで逆断層というのも少し難しい。あるいは、ただの盆地の縁かもしれない。

(休憩)

一②若狭海丘列北縁断層、②⑧長平礁断層、隠岐海嶺南縁断層について一

岡村主査：先程、見ていた若狭海丘列北縁断層に関する資料は多くあり、海活26参考資料6-1と6-2である。海活26参考資料6-1は、前回は1本しか断面を出さなかったが、今回は全部の断面を出している。赤い矢印とオレンジの矢印が断面に付いており、赤いところが断層で良いと判断した箇所、オレンジ色は少し微妙で断層ではないかもしれないところだ。ただし、シングルで見ると完全には否定できないもので、それが27hや27iくらいにあり、その先では(断層が)なくなる。そのさらに東側、長平礁断層も活断層と言われており、海活26参考資料6-1 p.10に測線図がある。その次ページから幾つか断面があるが、ここはシングルで見ても断層らしく見えるのは28aくらいである。北東-南西方向の測線の断面で、断層らしく見えている。その東への連続性を見ていくと、あまり断層らしくはない。ここは可能性のある構造として残すか、消してしまうかのどちらかだと思う。さらに西側には隠岐海嶺南縁断層があり、これは海活26参考資料6-2になる。こちらの断面も同じような感じであり、あまり活断層らしくはない断面が続いているため、先程の長平礁断層と同じような扱いになるかと考えている。②若狭海丘列北縁断層については、先程、石山委員から可能性のある構造で良いのではないかと意見も出た。海活26参考資料6-1 p.4、赤い矢印のある27b、27c、27d、27eあたりの断面である。27bの断面では、少し分かり難いが、この辺りを断層にした。この断面にはマイグレージョンをかけたようなノイズがあり、多分、プロジェクトの方で処理したのではないか。

高橋委員：離散化のようなことをしたのではなかったか。

岡村主査：北東の方に順番に見ていくと、27cは下の方を見て折れ曲がっているところに赤い矢印を付けている。上の方はやはり活断層らしくはない。27dも、引くとすればこの辺りで、崖の麓も一応(活断層の)可能性があるということで引いている。その隣の27eもここを引いている。

石山委員：その東西のものは引いても良さそうな感じがする。

岡村主査：さらにその東側ここまでは赤にしたが、その次の27fはオレンジの矢印にした。後は大体、同じような感じだ。上の方は、あまり折れ曲がりかたははっきりとはしていない。

石山委員：埋めているような感じである。

岡村主査：27hは少し折れ曲がっているように見えるため、ここだけ赤色矢印にしている。次が27iであり、この辺からはもう（断層は）無さそうな感じになる。測線番号27k、27k+では無くても良いかもしれない。27lも一応、矢印を付けてはいるが、断層らしい構造は認められない。

事務局（ ）：それでは、（若狭海丘列北縁断層は）27jまでということか。

岡村主査：その場合、今よりも少し短くなる。27kまでだろう。

事務局（佐藤）：27k+は入れなくても良いのか。

岡村主査：27l、27k+は断層に含めないで良い。

事務局（佐藤）：そうすると、（若狭海丘列北縁断層は）27kと27k+の間ということになるのか。

岡村主査：難しいが、それで宜しいか。

（異論なし）

事務局（熊谷）：（断層ではないとして）切った先は、可能性のある構造として残しておくのか。

岡村主査：可能性のある構造として別途引くかどうか。東西の部分は断層らしく見えるため、ここは断層として、その先を可能性のある構造にするのはどうか。

（異論なし）

事務局（佐藤）：西側は27e+と27fの中間地点までを断層とする。短い断層になりそうである。

石山委員：海活26参考資料6-1 p.9、27m-n+というのは、

岡村主査：これは少し北に外れている断層である。位置としては大分、離れている。

石山委員：続きではないということか。

岡村主査：このnは、27mの測線の北部という意味である。少し遠いため、断層と判断しても別の断層になる。

石山委員：丁度、27m-n+と書かれている2と7の間くらいに、剪断変形のようなものが見える。

岡村主査：少し正断層らしく見える。

石山委員：何か局所的な変形があるように見える。どこを活断層として引くのかはともかく、活きている構造としても見てもいいのではないか。短い。

岡村主査：長さは分からないが、同じような変形があるゾーンとして続いているかもしれない。

伊藤委員：南の方は斜面があり、深いところに平面があるというこの地形は、断層によって出来たという解釈で良いのか。

岡村主査：そうである。先程のマルチの断面等を見ると、山の方の基盤がトラフ側にずっと下がっている。それは多分、おそらく500万年前くらいのかかなり古い構造である。その前の、日本海が出来たときの構造もあるかもしれない。その圧縮によって隆起した変動で、基本的なこの形が出来た。この急斜面は今崩れているのだと思う。産業技術総合研究所の地質図でも、中新世の地層という判断になっている。ここは潜水調査もされており、サンプルを採って年代も化石で決めているため、古い石がここに出ているのは間違いない。そういった古い変動で、この大きな構造は出来ていると

考えている。日本海における大規模地震の調査検討会で断層モデルを作成するとき、委員からここは断層と意見があり、その意見を聞いて断層トレースを引いた経緯がある。

伊藤委員：南の方はその地形が断層で出来ていて、北の方は同じような地形であるのに断層がないとなると、その地形はどうやって出来たのか。

岡村主査：大きな地形そのものは古い構造で出来ており、現在の応力場でどこが動き出すかと考えた時に、南の方も本当に断層かどうかは分からないが、活断層評価をするからには、過小評価にならないように、それらしく見えるところは引いておいた方が良さだろうという判断だ。そういった基準で見ると、南の方の東西のところは断層として引いておいた方が良さ。そこから北東に走向を変えるところは、良く見るとそれらしく見えないけれども、可能性のある構造として残しておいてはどうかと考えている。

伊藤委員：理解した。

芦委員：画面左に表示されている測線図を拡大して、トレースがどこまでになるのかももう一度説明していただきたい。

岡村主査：この赤いところ (27e+) までは断層にする。この辺りから 27i までは、可能性のある構造とする。(事務局注：つまり、27e+と 27f の中間までが断層。そこから 27i と 27i+の中間までが可能性のある構造となる。)

芦委員：27i や 27j を繋げているが、繋げずに切ってしまうのはどうか。走向も変わっており、南の地形と対応しているようにも見える。北の方に行くと、エシェロンになっている。一番上にある断層も北方にずれている。繋げる理由があれば別であるが、切っても良いのではないか。

岡村主査：切るか切らずにおくべきか、何とも言えない。雁行させるか。27i を少し北に上げているので、27i と 27h を繋げると、27j まで行ってしまいそうである。その北で雁行するとなると、線の引き方としては少し不自然になる。この辺で全て雁行にしてしまうというのも、やり過ぎな感じがする。雁行の可能性はあるが、そこまで測線数がないため、これくらいにしておいた方が良さ。

芦委員：承知した。

岡村主査：次に、㊸長平礁断層の方は、引くとしても可能性のある構造になるかと思う。測線 28a のみ、断層らしい構造が見えてはいるが、周りを見ても繋がる場所がない。

石山委員：他の断面と構造も合わない。

岡村主査：複数の測線でトレースを引くことができないと描かないというのが原則で行っているため、なしで良いか。

事務局(佐藤)：長平礁断層は消すということか。

岡村主査：長平礁断層を消してしまうか、それとも可能性のある構造として残すか。

石山委員：消してしまっても良いのではないか。

岡村主査：先程、石山委員からご指摘のあったところが中途半端になっていた。

石山委員：27m-n+のところか。

岡村主査：そうである。斜面としては、測線図に引いているオレンジの線が斜面の走向にはなると思う。今は、平坦なトラフ底から盛り上がる所の境界を断層として引いているが、石山委員による斜

面の途中で正断層らしきものがあるというご指摘だ。それを拾うかどうか。

石山委員：27m-n と 27m-n+の方にも、似たようなものがある。その2本だけだ。

岡村主査：こちらの方が表層まで来ているので、こちらの方をとるべきかもしれない。27m-n+と、27m-n。最後の27m-n+も、同じようなものが少しあると言えはる。

高橋委員：それは左のところか。

岡村主査：この辺りである。それではこれを（断層として）引いておくか。

石山委員：位置的には合うのか。

岡村主査：大体は合う。

事務局（ ）：若狭海丘列北東断層は可能性のある構造に分類するのか。

岡村主査：海底まで達しているため、短いかもしれないが断層として引くことになる。

仲西委員：場所が合うかどうか。

岡村主査：一応、線にはなりそうである。

石山委員：大体繋がりそうなのか。割と小規模な断層である。

岡村主査：そうである。位置としては、引いた線の少し北側なので、おそらく全てその位置になる。

岡村主査：これは正断層で良いか。

石山委員：どうだろうか。下の方を見ると、もじゃもじゃしたリフレクションがある。今、画面に表示されているのは、27m-n+か。この資料にはないものか。

事務局（熊谷）：そうである。海活26 参考資料6-1 p.9に掲載されている。

石山委員：それをもう少し引いて欲しい。見え方が違うようだが、処理が違うのか。

高橋委員：処理が異なる。

岡村主査：JOGMECによる記録を拡大してもらいたい。その右側に断層らしいものが、あまりない。

石山委員：あまり良く分からない。そこではないか。

岡村主査：もう少し左である。これは、mもnと同じくらいなのか。

DB 操作者：m-nと同じくらいだ。

岡村主査：断面がそっくりである。ここには、今まで見ていた構造は明瞭ではない。

石山委員：こういった断面で見えないのであれば、表層の構造かもしれない。

岡村主査：その可能性はあるが、海底付近でずれていることはずれている。それでは可能性のある構造にするか。

石山委員：対応関係は分からないが、配布資料を見ると、27m-n+で海底面が2条くらい切れており、その下に上に凸の構造がある。これが何なのか良く分からない。

岡村主査：下と言うのは大分、下ということか。

石山委員：3000くらいであるが、これは基盤か。

岡村主査：この断面にとっては基盤であるが、この海域には所々に火山らしいものがある。

石山委員：そういうものかもしれない。その上にあるので、やや味が悪い。

山下委員：赤色立体を見ると、あまりこのトレンドではなく、別のトレンドに見える。

事務局（ ）：可能性のある構造か、活断層か決めていただきたい。

岡村主査：可能性のある構造である。

事務局（佐藤）：つまり、若狭海丘列北東断層について、可能性のある構造で良いか。

岡村主査：可能性のある構造で良い。

事務局（熊谷）：トレースはこのままで良いか。

岡村主査：トレースはこのままで構わない。

岡村主査：若狭海丘列北西断層について、これも基盤が上がっており、火山性の高まりが下にある。

石山委員：そう思う。

事務局（ ）：これも可能性のある構造か。

石山委員：火山だとしたら活断層の可能性もないのではないか。

岡村主査：測線の数も質も不足しており、悩まなければ可能性ある構造としておけば良いのではない
か。次に、隠岐海嶺南縁断層はなしで良いか。

事務局（ ）：日本海地震・津波調査プロジェクトで引いたものか。

岡村主査：そうである。海底断層で引かれている。

石山委員：独自では消していないと思う。

事務局（ ）：それでは、可能性のある構造か。

岡村主査：はっきりと消しても良いと断言できないのであれば、可能性のある構造になるが宜しいか。

石山委員：配布資料で言うと、海活 26 参考資料 6-2 の㉓か。

岡村主査：そうである。

事務局（ ）：青の矢印しかないが、これは誰が引いていたのか。

岡村主査：海底断層のプロジェクト（海域における断層情報総合評価プロジェクト）である。

石山委員：地形境界はあるが、推定で良い気もする。

事務局（ ）：可能性の低い構造（リニアメント）という分類もある。

石山委員：構造的にあまり逆断層のようには見えない。短縮構造もあまりない。

岡村主査：赤色立体図で見ると、隠岐海嶺が北東―南西に延びており、それを東西に切る崖構造が複
数ある。どれも基本的には正断層である。

石山委員：元々、その境界に正断層はある訳である。

岡村主査：基盤の落差はある。日本海が開いた時に出来た構造が主だと思う。

石山委員：下位の方で褶曲しているように見える層準も、多分そういった開裂時の堆積物である。

岡村主査：その後のものも乗っているとは思いますが、完全に水平に溜まる訳ではない。また、盆地の中
ではコンパクション（圧密）で下がる。そういった影響でこういう形には見えると思う。

石山委員：そのように見える。

岡村主査：それでは、断層として残さずに、可能性の低い構造とする。先程のものと少し差別化する。

石山委員：可能性が低い構造とした理由は書くのか。

岡村主査：書かない。聞かれた時は答える。

石山委員：単に、可能性のある構造と可能性の低い構造をそれぞれ書き、何が違うのかと聞かれた時
は答えるということか。

事務局（佐藤）：そうである。

岡村主査：一応、陸域の活断層ではリニアメントとなっている。

事務局（ ）：昔で言うところの、境界のようなものだ。まず動かないというのがL（可能性の低い構造）で、ひょっとすると動くかもしれないものがP（可能性のある構造）になる。

岡村主査：一先ず、今日はそのようにしておく。今後、特に異論が出なければそのまま公表する。

事務局（熊谷）：2007年能登半島地震の断層の括りについて、一緒にするかどうか。

岡村主査：今、ここで決めるのか。

事務局（熊谷）：深部を見て決めるのであれば、今回決めていただきたい。

岡村主査：2007年能登半島地震の断層は、私のトレースでは少し折れ曲がっているところがある。北東側が2007年の震源断層に相当し、南西側はあまり動いていない。それを1つの断層帯の異なる区間とするのか、異なる断層名を付けて分けるか。

石山委員：分けた場合は、短いのではないか。一緒にして20km程度ではないのか。

事務局（ ）：海士岬沖西断層は長さ19kmになっていた。門前沖断層と繋げて単位活動区間にすると入るが、単独にすると短い断層になる。計算の具合によって、19km（短い断層）になったり20km（評価対象海域活断層）になったりする。非常に際どく、現在のトレースで長さ19.4kmくらいになっている。

岡村主査：海士岬沖西断層と門前沖断層は近接しているため、1つの断層帯として2つの単位活動区間に分けておく。

事務局（ ）：その場合、海士岬沖東断層はどうなるのか。

岡村主査：海士岬沖東断層は別の断層とする。

石山委員：2007年の反射探査データは結構な数がある。

岡村主査：そんなにあったのか。一応確認するが、深い方の構造はあまり見えなかった気がする。

石山委員：そうかもしれない。

事務局（佐藤）：これを繋いで2区間にするということか。

事務局（ ）：それを繋いで1本にするため、短い断層ではなくなる。1つの断層帯として、門前沖区間と海士岬沖西区間となる。

岡村主査：一応、断層としては続いているため、1つの断層帯としたい。

—本日の審議内容について—

岡村主査：本日の審議内容について振り返りを行う。

事務局（熊谷）：本日の審議内容について整理する。③隠岐海嶺南縁断層は、可能性の低い構造となった。⑦若狭海丘列北縁断層は、南西側については活断層として、残りのトレースを可能性のある構造とする。④⑤門前沖断層と海士岬沖西断層を1つの断層帯として、それぞれの区間に分ける。④⑤海士岬沖東断層は、そのまま単独で残す。短い断層について、若狭海丘列北西断層と北東断層は、どちらも可能性のある構造とし、長平礁断層は削除する。特性表案の傾斜角が一部で変更となっており、能登半島北岸付近の断層について、沖ノ瀬東方断層から能登半島北方沖断層までの断層

は、海活 26 参考資料 5 では高角となっているが、中角とする。また、①⑨⑩S内灘沖断層について、北側に描かれていた、参考資料 4 において矢印のないトレースは削除する。

—5月頃に公表する資料のイメージについて—

岡村主査：5月頃に公表する資料のイメージについて、事務局から説明をお願いします。

事務局（佐藤）：（海活 26 参考資料 8-1 p. 17～19、海活 26 参考資料 8-2 に基づき説明）

岡村主査：ただいまの公表案について、ご意見・ご質問等あるか。

高橋委員：どういった文章にすれば良いかといったアイデアはないが、海域における断層情報総合評価プロジェクトでは、構造境界のような、連続性のない構造があれば読み取るというポリシーだったため、活断層であるのかどうかという評価はしていない。

事務局（佐藤）：活断層かどうか分からない断層も含まれているため、それについて誤解のないような記述の仕方を検討したい。また、（評価文の）タイトルというか海域名をどうするべきか。

岡村主査：どこまでが北陸に入るのか。

事務局（佐藤）：もし可能であれば、もう一回の審議で、富山湾の西側に分布する断層まで終わらせたいと考えている。富山県東部から新潟県沖合にかかる部分は含めない。ただし、これから順次、海域を東側に延ばしていくため、敢えて海域名を決めずに今回の公表ではこの範囲という言い方も良いのかもしれない。

岡村主査：北陸地域北方沖としてしまうと、北陸にどこまでが入るのが気になる。新潟は入らず、富山は入るのか。

事務局（佐藤）：そうである。

岡村主査：タイトルだけを見て、新潟県も入っているのかと思って見てみたら何も入っていないという事になってしまう。

事務局（ ）：北陸三県という言い方もある。

事務局（佐藤）：ただ、今回は富山も入らない。

石山委員：最終的には、日本海南東部として公表するのではないのか。

事務局（佐藤）：実は、日本海南東部という名称についても再考の余地があると考えている。

石山委員：それは確かにそうであるが、既に公表されている海域名は日本海南西部である。

事務局（佐藤）：中央、中東部、中南部等も考えている。

石山委員：いずれにしても、最終的にはもう少し広域の評価として出すことになる。

事務局（佐藤）：新潟県以東が、おそらく日本海東縁部になる。

石山委員：多分そのようになる。

岡村主査：名称に日本海東縁部を使うかどうかはともかく、一般的なイメージとしては、日本海東縁部と言えば新潟県から向こう側（北東側）だ。

事務局（佐藤）：今回、日本海東縁部にかかるところまでは微妙に届いていない。例えば、仮の名称で公表しておき、日本海東縁部まで評価が進んだ際に、正式名称を付けるやり方もある。

石山委員：逆に、例えば、富山トラフから若狭湾や、若狭湾—富山トラフ間など、もっとスペシフィ

ックな名称にしても良いのではないか。富山トラフの東縁が入らないのであれば、微妙ではあるが、若狭湾―能登半島はどうか。

事務局（ ）：一応、兵庫県も入っている。

事務局（佐藤）：兵庫県から能登半島周辺までとしても良いかもしれない。

石山委員：そのような感じで良いのではないか。

事務局（佐藤）：石山委員が言われたように、スペシフィックな名称の方が誤解は少ないかもしれない。

岡村主査：最初の公表は日本海南西部であったため、それとは違う路線だと思われる。今まで名称を先延ばしにしてきたのも、こういった難しさがあるからである。日本海南東部という名称には、反対意見も寄せられているため、変えた方が良いと思う。

石山委員：断層の活動性は評価に含めるのか。

岡村主査：含めない。

石山委員：あくまで緊急で出すもので、今回の評価では断層の活動性は含めず、今後になるということか。

事務局（佐藤）：緊急でこの海域の断層について公表したという、事実を述べるような名称の方が良いのかもしれない。

石山委員：その場合、特定した名称の方が切り分けが出来て良いかもしれない。

岡村主査：いずれ決めなければならない問題である。

事務局（佐藤）：一度、持ち帰って検討させていただきたい。

岡村主査：特定の地域名を出すのであれば、北陸は良くないかもしれない。

事務局（佐藤）：この他、何かお気づきの点があれば事務局までメールでお送りいただきたい。

議題2 その他

事務局（熊谷）：次回開催日は未定だが、4月中の開催を予定している。開催方法や日程紹介については、またメールで追ってご連絡させていただきたい。

岡村主査：（閉会）

以上